

12月20日「抑えきれない光」ヨハネ福音書1:1~14

クリスマスおめでとうございます！今年は例年とは異なる、特別なクリスマスとなりました。今日の日を皆さんと迎えられたことを心から嬉しく思います。今年は本当にコロナ禍に振り回された1年となりました。少し振り返ってみて、ある言葉をたくさん使った1年だったことに気付かされました。「密」ではなく、私の流行語は「どうせ」だったのです。「どうせコロナのせいで～出来ないし」とたくさん言いました。「どうせ会えないし」「どうせ帰省できないし」色んなことが制限され、諦めることの多かった1年のように思います。

先日、子どもの教会に集まる子どもたちに「どうせって言葉を使う人？」と聞いてみました。大勢手を挙げるのでビックリしました。ある小学6年生はこう指摘しました。「頑張りたくない時の言い訳によく使う！」なかなか鋭いと思います。そう聞いて、この4月から講話を担当するようになった少年院に入所している子どもたちの口癖が「どうせ」であることに思い至りました。「どうせ、自分になって価値はない」「どうせ生きていたって良いことなんてない。」「どうせ頑張っても無駄だ」etc たくさんの「どうせ」を口にするのです。色々な事情の子がいますが、少年院にいる子どもたちはある意味では被害者で、周りの大人から「どうせお前なんて」と否定的な言葉ばかりかけられて育ってきたのです。「どうせ」の闇の深さは深刻だと思います。「どうせ」は私たちから気力を奪い、希望を失わせ、愛をしぼませていきます。今、世界中は「どうせ」の闇に支配されているように思えます。

クリスマス、イエス様の誕生に立ち会った人たちの中にも「どうせ」の闇に飲まれた人たちがいたように思います。羊飼いたちです。「羊飼い」がどのような人たちか皆さんはご存じでしょうか？羊と同じで何となくのんびりほんわかとしたイメージを持つ人が多いかもしれません。けれども、聖書の時代、羊飼いは少なくとも皆がなりたい職業というわけではなかったようです。羊の世話はなかなか大変な仕事です。まず、羊と一緒にいなければなりませんので毎日野宿生活となります。そのせいで家族を持つこ

とが出来ず、身寄りのない者やワケアリ者が選ばれたとも聴きます。羊を守るため、時には狼、ライオン、熊などの野獣と命がけで戦わなければなりません。もちろん銃など近代的な武器は無い時代です。さらには神殿の礼拝にも出席できないので、不潔で、家も家族もない、不信仰な者たちだと蔑まれていたのです。

その晩、羊飼いたちはどんなことを思いながら過ごしていたのでしょうか。「どうせ、明日もしんどい仕事か」「どうせ、いつまで働いても楽にはならないだろうな」「どうせ俺たちのことなんて誰も気にかけてくれないよな」彼らは2000年前「どうせ・・・」の最先端に居たのです。

しかし、それがひっくり返されるような出来事が起きます。いつもと同じように野宿をしていたその晩、天使が夜空に現れ、羊飼いたちの周りを明るく照らしたのです。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」俺たちのために！？俺達なんかのために救い主が生まれた？彼らはビックリしました。さらに驚きは続きます。「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」救い主は飼い葉おけの中に産まれたというのです！救い主がもし王宮に生まれていたらどうでしょう。町の真ん中のきれいで清潔な病院だったらどうでしょう。羊飼いたちは会いに行きたくとも門前払いを食らったはずです。けれども、救い主は彼らにとってなじみ深い、家畜小屋の飼い葉おけのなかにお生まれになったのです。それは本当に羊飼いたちのための救い主だったのです！彼らはあまりに嬉しくて「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てました。(ルカ 2:16)」そして天使が告げた通りだったことに心から喜び、神さまを賛美しながら帰っていきました。飼い葉おけに寝かされた小さな赤ちゃん、イエス・キリストは「どうせ・・・」と諦める闇の中にいる人々にとって小さくとも大きな大きな喜びの光だったのです！

今日一緒に聴いたヨハネ福音書はこの世に来た救い主イエスを「光」だ

と語ります。人の形をとり、私たちに大切な言葉をくれた「光」だと。「言葉の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」諦め、失望、暗闇の中にいた羊飼いたちにとってイエスは本当に光でした。さらにヨハネ福音書は続けます。「暗闇は光を理解しなかった」この一文のギリシャ語の翻訳が難しいらしいです。いろいろな解釈があります。「闇は光に勝てなかった」新共同訳のように「暗闇は光を理解しなかった」そして私はこの訳が気に入りました。「暗闇は光を抑えきれなかった。」どれだけ濃い闇であっても、イエス・キリストという光はその闇を切り裂いて、留めきれない、抑えきれない光を私たちにもたらしてくれるのです。

今日の日を迎えるにあたって、私は考えたことがあります。「どうせ皆さんと賛美することもできない」「どうせ聖餐式も出来ない」「どうせ祝会も出来ない」じゃあ、どうしよう！？「どうせみんなで歌えないなら、演奏を聴けばいい！（素敵な演奏を心から感謝します）」「どうせ大勢で集まらないなら、少数で楽しめることをすればいいじゃん！」私たちを「どうせ」の暗闇が覆っています。けれども「どうせ」に「なら」を付け足すのです。「どうせなら、精いっぱい努力してみよう！」「どうせなら、楽しんでやってみよう！」「どうせなら希望をもってみよう」どうでしょう？ずいぶん意味が変わってきませんか？救い主の存在は、もしかしたら羊飼いたちにとって「なら」だったのではないでしょう。「どうせ、自分たちなんて・・・」と思い込んでいた羊飼いたち、でも「救い主が来てくれるならこんな俺達でも希望が持てる！」そう思えたのではないのでしょうか。

今、このときにも世界中には本当に厳しい状況に置かれている方々がおられることを覚えます。仕事を失って、経済的に追い詰められて、医療や福祉の現場では働きが過酷すぎて、大切な人と会う時間を制限されて、今年のクリスマスは「おめでとう！」とは単純に言いづらいかもかもしれません。それでも、暗闇は私たちを完全に覆い尽くすことは出来ません。闇では抑えることが出来ない光があるのです！「どうせ・・・」から「どうせなら」に私たちも変わっていきたい。どうせなら、新しい生き方を探してみまし

よう！どうせなら困難の人たちに心を寄せましょう！どうせなら、出来る
仕方で精いっぱい愛を分かち合いましょう。そして、どうせなら、今年し
かできないクリスマスをお祝いしましょう。クリスマスおめでとうござい
ます。